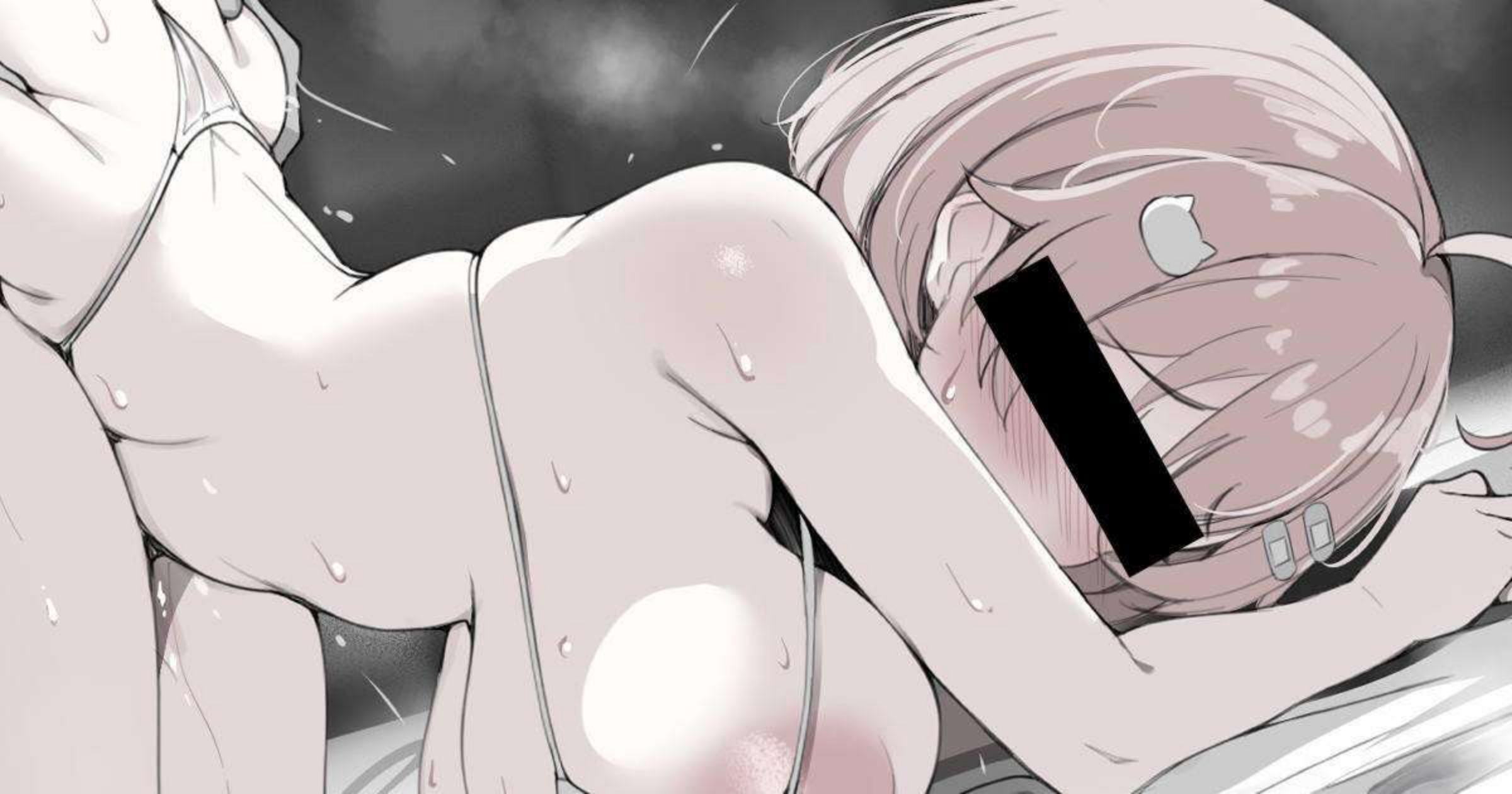




「はい、お電話ありがとうございます。〇〇エステサロンでございます」

『えっとお、マッサージの予約をしたいんですけどお』

「ご予約ですね。希望日時は——」

最初にその電話を受けたとき、あなたは相手が「子供」であると決めつけていた。

だって、こんな舌つ足らずなロリボイスで大人ということはあるまい。恐らくは中学生——なんなら小学生の可能性すらあると思った。

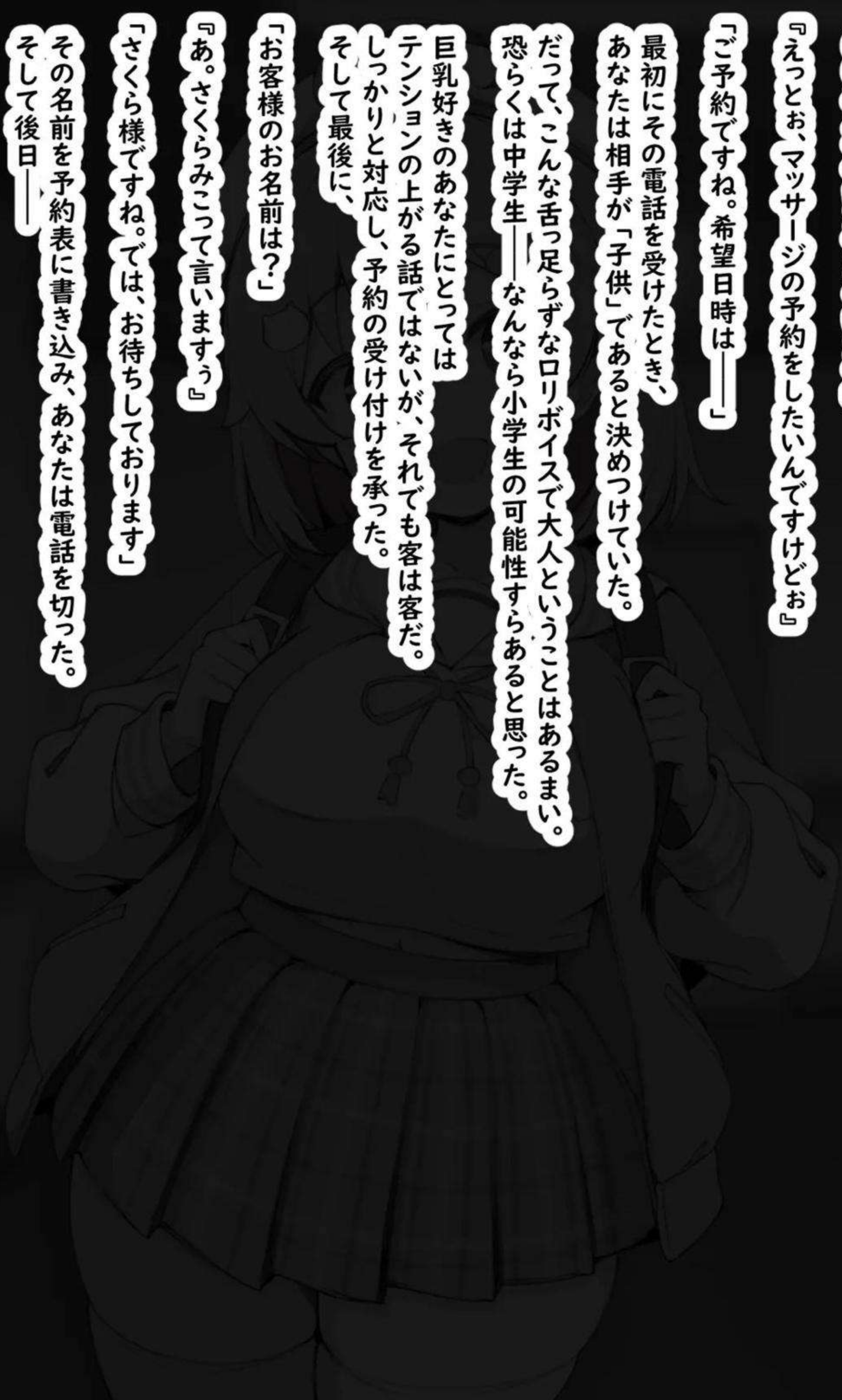
巨乳好きのあなたにとっては
テンションの上がる話ではないが、それでも客は客だ。
しっかりと対応し、予約の受け付けを承った。
そして最後に、

「お客様のお名前は？」

『あ。さくらみこって言いますう』

「さくら様ですね。では、お待ちしております」

その名前を予約表に書き込み、あなたは電話を切った。
そして後日——



「こんにちはあ。」

予約してたさくらみこなんですけどお」

「あつ……いい、いらっしやいます。」

ど、どうぞ、こちらへ」

「はーい」

あなたはどきまぎしながら
みこを店の奥へと案内した。

驚いた。

ロリはロリでも、
まさかこんな巨乳ロリが来るなんて。



しかも、めちゃくちゃ可愛いではないか。
アイドルか何かと見紛うほどだ。

あなたはこれまで巨乳といったら
「年上」や「お姉さん」といったイメージを抱いていたが、
彼女を見た瞬間に新たな性癖が開花したような気持ちになった。

服の上からでもこのサイズ感だ。
脱いだらもっと凄いのだろう。

早くも股間がイライラしてしょうがない。

「ぐふふ……ガキ相手に『これ』を
使うことはないと思ってたんだがなあ」

あなたはみこが更衣室で
施術衣に着替えているあいだに準備を整え、施術室で待ち構えた。



「おや、お着替えが済んだようですね。こちらへどうぞ?」

「は、はい……」

更衣室から出てきたみこは、恥ずかしそうにもじもじしていた。

それもそのはずで、みこが着ているのは大事な部分が辛うじて隠れているだけのマイクロビキニだった。

「あ、あのお……施術衣ってこれで合ってますかあ……?」

「ええ。そうですが、何か問題でも?」

確かに若い女性が着るには少々恥ずかしいかもしれませんがこの施術衣はインドやタイといったマッサージの本場でも古くから用いられている伝統的な――」

あなたがそれっぽいことを言い聞かせるように並べ立てるとみこは特に疑うでもなく「はえーそうなんだあ」と納得した。

「ちよろい――やれる――
あなたはそう確信した。」

「では、そのベッドで横になってください」

みこを言いくるめると、あなたは施術台を指さした。

みこはビキニがずれてしまわないように
気をつけながら、うつ伏せとなる。

「本日は痩身マッサージを
ご希望でしたね？」

「そうなんですう。
最近ちよつとお肉が
気になっちゃって……」

「なるほどなるほど。
お任せください。
ではまず、

マッサージオイルを
お身体に塗って
いきますね」

「はぁーい」

好ち♡

好ち♡

好ち♡

好ち♡



あなたは下心を隠しもしない手つきで
みこの身体に特製のオイルを塗りたくっていく。

そう、これは普通のオイルではない。

これはいわば「塗る媚薬」だ。

催淫作用のある成分が
含まれており、
経皮吸収により
効果を発揮する。

まるで
酩酊したかのように
頭がぼんやりして、
正常な判断能力を失い、
性的快感に
抗うことが
できなくなつて
いくのだ。

好ち♡

好ち♡

好ち♡

好ち♡



「いかがですか、お客様？」

「はふう……」

気持ちいいですう」

みこに何かを疑うような
素振りはない。

これが通常の
マッサージであると信じて
すっかり油断している。

「ふう……」

次はお尻の方を
失礼しますね」

これ幸いと、
あなたはみこの
デカケツを存分に
揉みしだいた。

好ち♡

好ち♡

好ち♡

好ち♡



「ほほう……これは確かに大したお肉ですねえ……」

スタイル自慢のグラドルにも引けを取らないようなサイズ感だ。それでいて肌のハリツやは手の平に吸いつくほどに瑞々しい

指先がむちつと尻肉に食い込んで、その弾力があなたを魅了する。

ズボンの中でめきめきとちんぽが張り詰めていく。

ぬちゅ♡

ぬちゅ♡

ぬちゅ♡

ぬちゅ♡

「んう……」

なんか、頭が……
ふわふわしてきた……」

「それはリラックスできている証拠ですね。そのまま
気を楽しんでください……」

媚薬オイルは順調にみこの身体を蝕んでいった。

マッサージ開始から十分ほど経過して、
みこの顔つきが明らかにぼうつとしてきた。

そろそろ頃合いだろう。

「では次に、お身体の前の方を
施術させていただきますね」

「んにや……は、はい」

ビキッ

あッ

もみ

んん

もみ

みこは寝起き直後みたいな
緩慢な動きでゆっくりと身体を起こした。

あなたの指先がビキニの内側にすりりと滑り込む。

さすがにみこもびくつと反応したが
あなたは構うことなく「施術」を続けた。



「あ、あ、あの、これ……
乳首、見えちゃ……」

「気にしなくて大丈夫ですよー。
あくまでマッサージなんでね?」

「は、はあ」

なんにも大丈夫じゃないのに、
すんなりと流されてしまうみこ。

ビィィ

あッ

もみ

んん

もみ

乳首丸出しのままデカパイを
激しく愛撫されても抗議の声ひとつない。
もうまったく頭が回っていない証拠だ。

「いやあ、お尻に負けず劣らず、
揉み応えのあるおっぱいですねえW
お客さん、小柄なのにこんな立派なもの
ぶら下げてたら大変でしょう?」

「う、うん……肩、凝るし……
ブラも、すぐ合わなくなっちゃうの」



「それならいつそのこと
ノーブラで過ごしてはどうですか?w」

「そ、そんなのヘンタイさんだよお……
みこ、乳首おつきいから……
お外、出られなくなるう……」

「確かにそうですね……
こんなデカ乳首じゃノーブラなのがバレバレだw
そんな状態で町中を出歩いたりしたら
レイプ不可避でしょうねえ……」

ビィィィ

あッ

もみ

んん

もみ

路地裏にでも連れ込まれて、
ロリまんこをずっぽずっぽ
されてしまうことでしょうw」

「レ、レ、レイプ……はうっ」

その瞬間を想像してしまったのか、みこは顔色を真っ赤に染めた。



「おや、どうしました？」

あ、お子様にはレイプという言葉の意味がわかりませんか？w」

「そ、それくらい知ってるもん。」

男の人が女の人を、無理やり、その……し、しちゃうことでしょ？」

「無理やりする？」

言葉足らずでよくわかりませんねえもっと具体的に言ってくれますか？」

ビィィ

「だ、だから……」

レイプっていうのは……」

男の人が、女の人に……む、無理やりおちんちんを挿れること……だよお」

それはまさに今からみこがされることの説明に他ならなかった。

もつとも、今の彼女にはそれがレイプだと判断することもできないかもしれないが。

あッ

もみ

んん

もみ



「では次に、おまんこの
マッサージを行いますね」

「え？」

「お、おまんこの……
マッサージ………??」

「膣内には瘦身に効くツボが
たくさんありましてねえ。
手っ取り早く痩せるには
これが一番なんですよw」

あなたはズボンを下ろして
勃起ちんぽを取り出した。

「へっ？」

「な、なんでおちんちん出して……」

「すぐにわかりますよ」

「え？ え？」

まさか、それ……
みこの中に、挿れ……」

あなたは黙して語らず、
言葉ではなく行動で答えを示した。



亀頭と膣口が擦れ合つてぬちぬちと音を立てた。
みこは慌てるが、その身体は既に言うことを聞かない。

「さ、一気に奥までぶち込みますよ!」

「ま、待つ……」

ンはああああああアア♥♥」

ずんっ！ と子宮口に響く衝撃。

催淫アロマの効果でしとどに濡れたおまんこが、
ちんぽににゆるにゆると絡みついてくる。

まるで腔壁全体が

しゃぶりついてくるかのようだった。

期待以上の具合にあなたは危うく射精しかけたが、肛門に力を入れてぐっと堪えた。

1313h

10
Feb

150-4-5

110
42
6

110
4
G-2

10423

みこは目を丸くして身体中を震わせながら、

「あ、あへっ♥

みこ……お、おちんちん
挿れられちゃった……♥」

「ぐふふ……w

当院はちんぽを使って

おまんこマッサージをするのが

売りでしてねえ。

お客様のような可愛らしい方には

特に気合を入れてサービスすることに

しているんですよ……こんな風にね！」

「んお、おほオオ♥

おんっおんっおんっおんっ♥」

みこの愛くるしいロリボイスは、

あっという間に汚いオホ声に変わった。



「あひゃ♥んひい♥な、な、なにこれえええ♥
しゅつごく気持ちいいよおお♥」

「どうやら気に入っていただけたようですねえw

当院のおまんこマッサージは、
天にも登るような快感だと
特に女性のお客様から好評なんですよ。
ほら、Gスポにカリが
ごりごり挟れて堪らないでしょ?」

「は、はひい♥
そこいいでしゅううう♥」

みこはもうとつくに快楽の虜だった。
あなたのデカちんを幼いまんこでぐっぽりと啜え込み、
巨乳を上下にぶるんぶるん揺らしながら、
とろつとろの表情で喘ぎ散らかしている。



あひゃ

あひゃ

ぶるん

ぶるん

110
4
G

110
4
G

110
4
G

110
4
G

110
4
G

110
4
G

「はあああ、みこちゃんのおまんこ
よすぎて腰止まんねえわマジでw
社会勉強の足りてない

メスガキ騙して
オナホにすんの
最高すぎるだろw」

「えっ、ふえ♡

お、おじたん♡

いま、なんて……おツ♡」

「くく、なんでもないよ。

それよりほら、

ちんぽに集中して!」

「おほおオオン♡

お、奥ううう♡

ぶつといの突き刺さりゆうう♡♡」

「あーいい感じた。

ほら、みこちゃんも一緒に腰振って?

そしたらマッサージの効果も倍増して

もーっと気持ちよくなれるんだよ」

「な、なりたい♡

みこ、もっと気持ちよく
なりたいれす♡」



「じゃ、俺とリズムを合わせて一緒にパンパンしようか？ほーら、パンパン、パンパンw」

「あつ、はっ♡ はい♡ パンパンパン……♡」

「もっとだよ、おら！カワイコぶってないで下品にケツ振れ！なんのためにこんなエロい身体してんだ！おちんぽ様に媚びるためだろうが！」

「あひイーン♡♡ ご、ごめんなしやいいい♡♡」

尻を思いつきり引つ叩いてやると、みこの動きが目に見えて激しくなった。

「パンパン♡♡ パンパン♡♡ おちんぽパンパン♡♡」

「おっ、いいぞ。全自動ちんぽケースきたこれ。もうこんなの完全に和姦だろ」



「おっ♡お、おじ
おじたん♡」

「んん？」

「みこ♡」

「な、なんか……くるっ
き、きちゃうう♡
ああっぐうううう♡」

「そう言うってから間もなく
みこは絶頂を迎えた。」

「ぶしゃああああああつと
派手に愛液を
ぶち撒けながら、」

「ンおっ♡、出りゅ♡」

「お、お潮噴いちゃう♡
みこ、マッサージされてるだけなのに♡
セックスしてるわけじゃないのに♡
おじさんのちんぽで気持ちよくなって
勝手にアクメ決めちゃったよお♡」

「あーあー、みこちゃんってば
やってくれたねえ……
くっせえメス汁ひっかけやがって。
ベッドがびちゃびちゃだよ？」

「ご、ごめんにやさしい♡
許してええ♡」



「反省してるの？」

「し、してますう♡
みこ、ザコまんこで
ごめんなさい♡」

「そうだなあ……
わかった、じゃあこうしよう。
俺も今から同じことを
みこちゃんにするね？」

「お……同じ、こと？」

「ああ。
そうすればお互い様だろう？
それでチャラにしようよ、ねw」

「わ、わがったああ♡
おじたん、優しい♡
ありがとう♡」

みこは、あなたの言葉の意味を
正しく理解できているのかどうか——
この状況でありがとうなどと
お礼まで言ってしまう始末だ。

デカケツをパコパコと打ちつけて、
完全に自らの意思で精子を
搾り取ろうとしている。



「いいぞお、いいケツ振りだあ……
みこちゃん、オナホの才能ありまくりだよw」

「あ♥ありがと、ございま……あっ♥
はあっ♥はっあああッ♥
お、おちんぽ、びくびくしてきたああ♥」

「ああ、いい感じに込み上げてきたよ。
こりゃあえぐい量が……ぐっ、出すぞ！」

みこちゃんのおまんこに、
今日出会ったばかりのおっさん精液
発射するからな！」

「はいい♥
ら、らひてくらひやいいいい♥」



「孕め、おらア！」

「あ、あ、あッ♡」

「あちゅいの来たああああ♡♡」

とくん、とくんと脈打ちながら、

みこの子宮にあなたの精子が注ぎ込まれていく。

あなたは根本までちんぽを突っ込みながら、
それでも足りないとはかりに、
腰をぐりぐりとみこのデカ尻に押しつけていく。

みこは無様に喘ぎながら再びいき果て、股ぐらからまんこ汁を撒き散らした。

「ああああっ……♡」

ど、どふどふ気持ちいい♡
らめええまたイぐうううう♡」



「こらー！なにやってんだー！」

「んっほお♡ お、おちりぶたないでええ♡」

「まったく、性懲りもなく

まーたメス汁ぶち撒けやがって……

これがなんのためのお仕置きか、わかってんのかあ？」

「ひゃ、ひゃい♡

そ、それは♡ みこが♡

こんなところでいっぱいお漏らしするよう……

わ、悪い子だから、ですう♡

そ、それなのにまた

ガチイキしちゃってごめんなしい♡」

「こうなりや、追加の罰を与えるしかねえな？
中出し、もう一発だ。いいな！」

「は、はひい♡

おねっ、お願いしますう♡」



言質を取ったあなたは、そのまま抜かずの二回戦を始めた。

しかし、みこはその後も何度も何度もイキまくり、あなたのお仕置きはエンドレスループに陥った。

正常位で、後背位で、座位で立位で駅弁で、みこの豊満ロリボディを枯れ果てるまで堪能した。

もちろんすべて中出した。

施術台の下ではあなたの精液とみこの漏らした愛液が水溜まりとなっていた。

長い行為の中でみこはふと、

「あれ……おまんこって中出しされたらどうなるんだっけ……？」
と思うこともあった。

しかしすぐに

「ああん♡」おちんぽが気持ちよすぎて何も考えられないよおお♡」
と、圧倒的快樂に脳を焼かれてしまい些細な疑問など吹き飛ぶのだった。



「んじゅぼっ♡ぢゆるるる♡
んじゆるうううううううう♡」

みこはあなたの前に跪き、
先程まで自分の中で暴れていた陰茎を
熱心にしゃぶっていた。

股の間から、粘っこい白濁液を
ぶりゅぶりゅと垂れ流している。

「ふうふう
もう一滴も出ねえや……
みこちゃんのおまんこに
ぜーんぶ出しちまったからなあw」



最後までお漏らしの止まらねえ
だらしない穴だったが……

ま、今日のところはこれくらいで許してあげるね」

「あ、ありがとう、ございまいっ
れろれろれろ♡」

「勘違いするなよ？」

今日のところは、だからな」

「は、はい♡」

みこの蜜壺が

「きゅんっ♡」と窄まった。

あなたの発した言葉の意味を、
今度こそみこは正しく理解していた。

その淫らかな微笑が物語っている。

既に自分が、あなたの専属肉便器である
という自覚は十分なようだった。

「くくく……では、またのご来店をお待ちしていますよ」

